

## 2019年度事業計画

学校法人 東洋英和女学院

(はじめに)

当学院は、キリスト教（プロテスタント）の信仰と聖書の教えに基づき、建学の精神である「敬神奉仕」に沿った、人間形成を重んじる学校教育を行っています。

本年度は、学院創立135周年、および大学開学30周年を記念する節目の年にあたります。カナダ婦人宣教師によって建てられた学院の原点を改めて確認しつつ、幼稚園から大学院に至る総合学園としての教育の一層の充実を図り、私どもへお寄せ頂くご期待にお応えしていくよう、教職員一同、力を尽くしてまいります。

2019年度の事業計画は、次のとおりです。

(目次)

1. 各部の教学計画
2. 各部の環境整備計画
3. 管理運営計画
4. 六本木五丁目西地区市街地再開発事業への対応

### 1. 各部の教学計画

(大学・大学院)

《大学》

六本木再開発事業に対する学院基本方針の策定により、大学は現所在地に残留の上、所要の投資を行い、ソフト・ハード両面で今後の発展を期することと決した（後述4. 参照）。このため、今後30年間で射程とした長期的な大学のあり方をめぐる将来構想の検討に着手し、2019年度内にこれをNext30構想として成文化することを目指す。同時に、その初動段階として2020年度からの第1次五ヵ年計画（2020～24年）を策定し、併せてその初年度事業計画の詳細を決定する。これら一連の構想および計画は、学院の建学理念である「敬神奉仕」の精神を現代社会において具体的に実現するには如何なる方法・手段に基づけばよいかという問題関心を中軸として検討されることになる。同時にそれが区々たる個別の技術論に偏ることなく、「育成を目指す学生像」、「リベラル・アーツ型大学としてふさわしい学部学科構成」、「新型施設・設備を含むキャンパスの刷新」、「学生の育成に資するカリキュラム／教育体制」、「教員の研究環境および職員の労働環境の向上」

等、広範な検討項目を包括的にカバーするものとなるよう努める。

2019年度が学院創立135周年、かつ大学開学30周年の節目の年にあたることから、学院と共催、大学単独開催の二つの類型で周年記念行事を開催する。内容は、記念講演会、記念式典、名誉教授称号授与、名誉博士称号授与、記念記録誌作成、記念サイト作成、ホームページ全面改修、ロゴおよびグッズ作成など多岐に及ぶが、一連の周年事業実施を契機として上記将来構想の実現に向けた対外広報発信の格段の強化を図る。従来の「村岡花子記念講座」をはじめ、学部・大学院・各研究所等の企画する既存の諸事業や、港区等との連携諸事業についても、特に「135+30」の冠事業として周年行事の中に位置付けて展開する。

新カリキュラム始動に際して、従来のラーニングコモンズ、学習サポートセンター、および基礎教育連絡会をとりまとめ、これを統合的に運用して学生の利便に資することを目指す。2020年度入試に際しては、他学科に先駆けてAO入試の導入を図る保育子ども学科の募集状況および選考過程を注視し、その効用の分析と評価を進める。

#### 《大学院》

2020年度から両研究科において大幅なカリキュラム改革を実施するため、新3大ポリシーの策定、新カリキュラムの導入準備を行うとともに、これらを周知するための広報活動を積極的に展開する。この取り組みを通じて、新たな社会人学び直しの高等教育機関として、高度な専門性を持った人材を社会に輩出していく大学院を学院内外に発信する。

人間科学研究科修士課程は、人間科学領域を5分野から2分野に統合。幼児教育コースを幼児教育・発達臨床学領域に発展させ、3領域体制とする。

死生学関連分野は、2020年度からの上智大学大学院実践宗教学研究科死生学専攻との単位互換制度実施に向けた諸準備を行う。

国際協力研究科修士課程は、国際協力領域と国際社会領域を、それぞれサステイナブル国際協力コースと国際政治経済・地域研究コースに再編成するため、新科目とともに既存科目についても担当者の見直しを行う。

#### (中学部・高等部)

建学の精神である「敬神奉仕」を教育の基盤に据え、中高6年間を通じて「敬神奉仕の実践者」を育成する。生徒が目指すべき姿として「他者のために、なすべきことを自ら考え、行動することができる女性」と改め、これを中高部のディプロマ・ポリシーとする。ロールモデルは創立者マーサ・J・カートメルであり、そのために育成すべきものは「他者理解と自己理解」である。自分をみつめることと他者を知ることが様々な教育カリキュラムから導いていく。

その根底には揺るぎない基盤であるキリスト教教育がある。毎朝の礼拝や聖書の授業、修養会などの行事を通じて人間性の涵養を図り、神と自分の縦

軸の関係性をしっかりと身に付けさせたい。その基盤の上に次の3つの特徴あるカリキュラムを積み重ねる。

①国際性を養う。 ②タラントに気づく。 ③感性・教養を磨く。  
いずれも主語は生徒である。生徒が自らこれらのスキルやコンピテンシーを認識し、自立した学習者となるように仕向けていく。

①について。養うべき素養はコミュニケーション力は無論のこと、国際問題への関心、多様性の理解である。特に長年構築してきた海外語学研修や短期留学・認定留学を、昨年度開設した海外留学支援室を中心に運営する。実体験を重視したプログラムから、参加した生徒が他の生徒へ刺激を与えるような仕組みを研究する。さらに今年度から総合探究委員会を立ち上げSDGsを中心とした総合探究の研究を進める。

②について。生徒が自ら自分に与えられたタラントに気づけるような教科指導を目指す。知識技能を身に付ける基礎力はもとより、表現力、探究力、対話力を身に付けるために、自分は何が足りないのか、何を学習すべきなのかといったメタ認知を導けるような授業や評価を研究し、それをスパイラル的に実践していく。その過程から少しずつ自己理解と他者理解を獲得させる。特に今年度は生徒に個人PCを持たせ、様々な場面で活用することによって主体的な学びができるよう促していく。すでに試験的にポートフォリオ入力を行っており将来的な進学のための蓄積や生徒同士の情報共有などで成果を挙げているが、さらなる活用を研究し、将来において必需の機器を学習ツールとして位置付け、リテラシーを身に付けさせる。

③について。音楽・美術を中心とした芸術教育は中高部の大きな特徴である。鑑賞や発表の場面を多く設定し、豊かな感性を身に付けさせたい。さらに日々の学習が単なる受験や成績のためではなく、広く教養が身に付くようなものとし、生徒個々の人生が豊かなものになるような礎を中高6年間で築かせたい。

## (小学部)

朝の賛美・祈りに始まり、様々な形で聖書の言葉が語られる日々の中で、小学部の児童たちはあふれんばかりの神の愛と恵みを浴びている。「敬神奉仕」の精神の具現化を今年度も教育の第一義とする中で、一人ひとりが神により造られた存在であることに気づき、いただいた愛と恵みを用いて、かけがえのない自分と、他者を愛することができるよう導く。そのために昨年度より始まった「小さいかご活動」をさらに充実させ、「隣人」について考え、学び、行いをもって「隣人」を愛することを伝えていく。

教科教育においては、児童がそれぞれに与えられているタラントが生かされ、学びが喜びにつながる教育内容を引き続き目指していく。友だちのタラントをも大切に育てる学び合いを、各教科で進めていく。その手段の一つとして、「小学部ならではの」のICTを活用した教育の研究を進めていく。

さらに伝統的に特色ある英語教育、回を重ねますますます意義を深めている姉

妹校の梨花女子大学附属初等学校との交流を含む国際教育の推進を図る。今年度からは、英語科授業以外の場で英語を使う機会を増やすことも進めていく。また運動会、学芸会、コンサート、夏期学校、修学旅行など年間の様々な行事をさらに充実させ、児童の生き生きとした取り組みを全力で支える。

また固有の課題を抱える児童一人ひとりに寄り添い、笑顔の日々が過ごせるように、教員間の連携を深め、養護教諭、カウンセラー、管理職が関わる教育相談体制をさらに充実させていく。

同時に、未来の小学部の教育を創り上げるための長期将来計画を系統立てて進め、形づくっていけるよう努める。

### (東洋英和幼稚園)

子どもたち一人ひとりが自己を大切に思い、神によって与えられている賜物・個性を自覚していくことができるよう、まずは保育者が子どもたちを受容し、一人ひとり異なる賜物を尊重して個性に応じた援助をしていく。

男女共学での3年保育は5年目を迎えるが、行事の持ち方、各年齢の発達段階を踏まえた保育内容の検討をさらに深めていく。多様な形で学年を越えた活動を行い、異年齢同士でも相互に豊かに学び合うことができるよう引き続き配慮をしていく。

「敬神奉仕」の精神を具現化するため、東日本大地震で被災した幼稚園、アジアキリスト教教育基金を通じてバングラデシュの子どもたちや寺子屋学校への多様な支援を継続していく。守り続けるべきことと時代の流れにより変化が求められていることを見極め、現代の子どもや保護者にとって必要なものを具体的に検討し追い求めていく。

### (大学付属かえで幼稚園)

学院、大学とのつながりの中、地域に根ざす幼児教育・保育の場、そして子育て支援の場としてキリスト教を基盤とした教育を重ねていく。2019年10月から実施される「幼児教育無償化」は、少子化対策の一つでもあるが、それ以上に幼児教育の重要性を考えての方策であると受けとめる。「東洋英和の継承してきたキリスト教保育とは」「この時代の幼子と家庭（保護者）への真の支援とは何か」を探究し、保育の構造と内容を維持向上させていく。このため、引き続き園内外での教職員間の学び合いを大切にするとともに、「敬神奉仕」の理念をもとにした園の使命を実現していくための「これからのかえで幼稚園」の計画を立て、方向付けていく。

大学との連携は保育、研修の両面で近年、具体的な展開をみており、キリスト教に立った教育の確認と共通理解をさらに深めていきたい。また、教育実習の場として、保育への希望と使命感を持つ保育者の育成への協力を努めたい。

## 2. 各部の環境整備計画

### (大学)

建築設備の改修については、大教室の天井落下防止対策が昨年度で一段落し、2019年度以降は、今まで積み残した建物の大規模修繕を計画的に進める予定である。昨年度の1・2号館屋根防水改修に続き、今年度は3号館屋上防水改修を行う。同時に空調設備の更新も行い、屋上の屋外機基礎周りの防水欠陥を無くす。その他には、礼拝堂のパイプオルガンのオーバーホール、30年を経た1号館系統の非常放送設備の更新、20年を経た9202教室のAV設備の更新などを予定している。また、新年度から学生食堂の運営委託先が変更になる。中央館食堂と6号館食堂のメニュー構成に変化をつけることで、昼食時のアメニティの向上と、食堂の利用率の改善を図りたい。

### (中学部・高等部)

昨年度にリニューアルした西棟5階マルチラーニングルーム(MLR)は教育効果の高い汎用性のある教室として活用できているため、さらなるバージョンアップを図る。また今年度スタートの生徒個人PCの導入に伴い、校内Wi-Fi環境整備の拡張を行いたい。2020年度はさらに1学年分の生徒個人PCが増え、教師のICT機器の活用も増えるため、今年度はコントロールする拠点としての情報ステーション(仮)の設置計画を進める。西棟3階の社会科教室・社会科資料室・316教室をリニューアルし、校内の中心となる場所に情報ステーションを設置し、ICT教育がより円滑になるような環境を整えたい。今年度は、仮の部屋に情報ステーションを作り、教育活動をサポートするための事務員を配置する。なお、2021年度以降、図書室やLL教室を将来の教育環境に合うようにリニューアルを計画中である。また学校運営システムに新たな機能を構築し教員事務の業務軽減と効率化を図る。既存の校内設備としては、西棟外壁改修や東棟4階空調設備更新を行う。

### (小学部)

現校舎の経年劣化に対処する外壁補修工事を、2016～2018年度に亘り実施し完了した。今次計画は校舎の空調設備更新を行い、快適な教育環境のため整備を実施する。

また2018年度にPC教室、および図書室の図書システムのリニューアル工事を実施したことに合わせ、連携度を高めるため2019年度は教職員用PCの更新を行う。

### (東洋英和幼稚園)

昨年度に引き続き園環境の充実を図っていくが、屋外においては特に裏庭を重点的に行い、緑化パネルの設置、外階段ステップの交換工事を実施する。さらに園舎内の環境の充実も目指し、ホールの空調機2台を更新する。

### (大学付属かえで幼稚園)

今現在の園児と保護および保育者の安心・安全・健康・保育の質が守られるよう、環境の整備と設備の充実を図る。大規模なこととして、2018年度に続いての天井の補強、また外周ブロック塀の補強などを計画している。

一方で、教学計画を土台にして、5年後10年後を見据えた園舎建て替えの可能性を学院・大学とともに具体的に考えていきたい。

### 3. 管理運営計画

当学院の各部門が上記の教学計画、環境整備計画を円滑に実施できるよう、法人事務局および各部事務部門において、以下の課題に重点を置き取り組む。また、法人事務局の学院本部として収集機能、企画調整機能の強化を引き続き図っていく。

- ・厳しさを増す学生・生徒募集環境に対応し、学院各部の関係者との緊密な連携のもとで、効果的な募集・広報活動を実施する。
- ・現下の金融情勢を踏まえながら、安全性と収益性の両面に配慮した資産運用を行うとともに、必要な検討を行う。また、将来の人口動向等今後見込まれる環境変化を視野に入れながら、学院の将来を見据えて財務基盤の充実を引き続き図る。
- ・広報活動や東洋英和楓の会の運営を通じ、全ての学院関係者と学院との連携を引き続き強化する。また、東日本大震災等の被災地支援を継続する。
- ・教職員が一段の能力向上を図り、働き甲斐を感じることができるよう、良好な執務環境の確保にあたる。また社会全般の雇用状況を踏まえつつ、処遇の改善に引き続き取り組む。
- ・法令、規程に基づき適正に事務を遂行し、特に補助金、科学研究費など公的資金を財源とする研究費について、法令等に基づき適切な管理運用を図るため、監査体制を適切に運営する。
- ・取引先との既往契約を合理性・効率性の観点から見直し、大口契約を中心に競争見積り合わせを実施することにより、予算の適正かつ効率的な執行を図る。
- ・当学院が保有する史料を活用した展示をさらに充実させるとともに、保存活動を推進する。

#### 4. 六本木五丁目西地区市街地再開発事業への対応

当学院は2018年11月30日開催の理事会において、以下の方針を決定し、今後必要な検討を進めていくことを決定した。

- ・これまで大学の横浜校地から六本木校地への完全移転を前提に、六本木西地区市街地再開発事業に参画する方針の下、計画の検討を進めてきたが、2018年6月に公布された東京23区内所在大学の定員増加抑制のための法律および政令に照らして当学院の大学移転が困難であることなどに鑑み、当面大学の移転は行わないこととする。
- ・しかしながら、同再開発事業の実現は幼稚園、小学部をはじめ、六本木校地各部の教育環境の改善・向上につながるものであり、また当地域における学院と地域社会との密接な関係等も踏まえ、当学院として同再開発事業に参画する。なお、開学30周年を迎える大学については、施設の整備はじめ、その魅力度向上のために必要なプランを今後速やかに実施していく。

以 上